

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23330263

研究課題名(和文)9年一貫型の地域連携で取り組む品格教育への理論とエビデンスに基づく提案型研究

研究課題名(英文)Research the theories of character education and analyzing the effects piled up during compulsory education keeping in close contact with parents and community.

研究代表者

青木 多寿子(Aoki, Tazuko)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：10212367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：よい行為の習慣形成を目指す品格教育(character education)は、小中連携の9年一貫で、学校・家庭・地域で連携して子どもの規範意識を育む生徒指導体制の確立を可能にする。本研究では、米国の品格教育優秀校の視察を通して、品格教育の実践に関わる具体的な手立てだけでなく、単なる徳の提示にとどまらない品格教育の本質について論考した。加えて、小中学校へのアンケート調査で、品格の構成要素を示した。さらに、品格教育は、1,2年くらいで成果が出るような教育でなく、5,6年目かかること、また特に中学生で大きな成果が見られることを示した。

研究成果の概要(英文)：Character education aims at making good habits for students with core virtue. We can imagine long span education, for example, all over the compulsory education is more effective than just depending upon each classroom teachers. We are sure that cooperating education with parents and community are more effective than just teachers. We would be sure that a core made them cooperate easily. Character education has a possibility to be a core of comprehensive education reform to bring up good citizens. In this research, we discussed it by visiting schools visits which had gotten "National School of Character". We discussed from four professional points; educational psychology, philosophy and ethics, special education and visual design. We also examined the effects of character education for six years. We found that we could see effective results after we had continued for five or six years' education. That means we need to have grate perseverance to establish good habits for students.

研究分野：社会科学

キーワード：生活指導・生徒指導 品格教育 小中連携 学校・家庭・地域の連携 エビデンスに基づく成果 ポスター 道徳教育

1. 研究開始当初の背景

Character (品性) には本来、彫り込むという意味がある。つまり Character とは、自分の中によい習慣を培い、よくない習慣を削ってゆくような、生まれつきの性格ではなく、生後のよい習慣の形成で培われる人格の部分をさす(Ryan & Bohlin, 1999)。品格教育では、respect, responsibility, honesty, perseverance 等、文化を越えて共通によいとされる核となる徳(コア・ヴァーチュ)を設定して、児童生徒に自らの習慣の振り返りを促す。つまり、自分の性格を自分自身で創ることを理解させるところから教育を始める。

Character (品性) とは、生まれつきの性格ではなく、生後のよい習慣の形成で培われる人格の部分の意味する。つまり、品格教育(character education)とは、子ども達が善い習慣(毎日学習する、敬語を使う、他者に親切にするなど)を形成できるように、学校全体、学区全体でスタンダードを定め、例えば、月に一つ、重要項目を定めて学校中で取り上げ、学校・家庭・地域で連携して実践の機会を作り、義務教育9年間で繰り返し積み上げて、子ども達によい行為の習慣を身につけてもらう教育である。

本研究は、青木が米国で品格教育を目にしたことに端を発する。その中で、今回申請分の研究を始めた背景は次の3つである。平成20年の国立教育政策研究所による「生徒指導資料 第3集」で規範意識を育む生徒指導では、保護者、地域住民や教員間で生徒指導についての共通理解をはかる重要性が指摘されたこと、人の強みを育み、健やかな育ちを促そうとするポジティブ心理学が興隆し、よい習慣づくりの核を科学的に解明する視点が与えられたこと。そして、これらの二つは、品格教育と類似点が多いことである。三つ目は、前回取り組んだ教育現場の実践研究に関して、品格教育の継続的な研究が可能になったことである。

2. 研究の目的

品格教育は、よい行為の習慣形成を目指すという本質から、小中連携の9年一貫で、学校・家庭・地域で連携して子どもの規範意識を育む生徒指導を可能にする。申請者の周囲で、全国150校以上が品格教育に取り組む中、実践に必要な具体的な工夫はまだよく知られていない。そこで、小中学校の接続、学校・家庭・地域の連携の具体的な方法を提案することを目指す。加えて、教育効果の測定について、エビデンスに基づいた成果を検証し、教師にとって、9年間という根気強さが必要な、成果の見えにくい教育をくじけずに続ける資料を提供する。

3. 研究の方法

品格教育は、包括的な学校改革という側面を持つ。そこで、教育心理学、倫理学、特別

支援教育、視覚伝達デザインという、研究領域の異なる複数研究者でチームを構成する。具体的な取り組み内容は、以下の通りである。

1) 米国で品格教育優秀校を視察し、米国の展開を、小中の接続、家庭・地域との連携、問題行動の指導、心理教育プログラム、道徳教育、倫理学、特別支援教育、連携のための仕組み作り、ポスターや振り返りシート等の、教材や道具を含めて視察する。これらの視察をベースに、日本の学校教育に提案できるものを目指す。

2) 日米の実践の取り組みをまとめ、後発の学校の参考となる資料を作る。

3) 米国の実践者を招いて、情報交換を行う。

4) 品格教育実践校の教育効果について、認知理論に基づく方法と、継続的な方法で検証し、エビデンスに基づく教育の成果を詳しく検証する。

4. 研究の成果

(1) 成果の概要

視察の成果は、青木・川合・山田・宮崎・新・橋ヶ谷(2012)、青木・川合・山田・宮崎・新(2013)で論考した。この中で、米国の優秀校について、小中連携の工夫、問題行動の指導、ポスターや振り返りシートなど、教材の紹介を具体的な取り組みを紹介した。加えて、日本の品格教育の具体例は青木(2011)に、認知心理学的な成果については、青木・高橋・柴(2011)に報告した。また、アメリカの研究者を招いて、日本の学会でシンポジウムを2回、その他意見の交換会を1回行った。

以下には、専門性の異なる研究者による成果をまとめて、包括的な学校改革である品格教育について、多角的に記述することで、品格教育の包括性を示したい。

(2) 教育心理学の観点から

- 品格の構成要素と品格教育の成果、品格教育の評価について

キャラクター・エデュケーション(character education)の教育効果の検証のためには、キャラクター(品格)を正確に測定するための道具が必要となる。そこで本研究では、小中学校でのキャラクター・エデュケーションの実践を継続して実施するとともに、質問紙調査法を用いたキャラクター・エデュケーションの効果測定を行ってきた(e.g., 青木, 2011; Aoki, Takahashi, Yamada, Hashigaya, & Miyazaki, 2013; Yamada, Aoki, Hashigaya, Kawai, & Atarashi, 2012)。

井邑・青木・高橋・野中・山田(2013)は、児童生徒を対象とした品格を測定するための尺度を開発した。同様の目的で開発された尺度には、VIA-Youth(Park & Peterson, 2005)があるが、この尺度の項目数は200項目近くあり、学校場面での実施を考えると項目数が多すぎて実用的ではない。そこで、井邑他

(2013)は、より少ない項目で日本の児童生徒の品格を測定する尺度を作成することを目的とした。関東地方の小中学生 1351 名を対象に質問紙調査を実施し、4 つの下位尺度(根気・誠実, 勇気・工夫, 寛大・感謝, フェア・配慮)からなる 24 項目の尺度を作成し、これを児童生徒用品格尺度と名付けた。井邑他(2013)ではさらに、この尺度の信頼性・妥当性の検討、及び、Well-being との関連の検討を行っている。

青木・山田・若井田・Berkowitz・二宮(2013)は、児童生徒用品格尺度(井邑他, 2013)を用いて、キャラクター・エデュケーションの効果を平成 19 年から平成 25 年にかけて継続して測定した。その結果、小学生でも、中学生でも、平成 25 年の得点が一番高いことがわかった。さらに、Figure 2 に見るように、中学生では特に、品格教育の累積の成果が大きいことがわかった。

しかし、この調査では、毎年同じ学年の児童生徒(同じ自治体に属する小中学校に在籍する)が対象となっており、キャラクター・エデュケーションの効果と、当該年度の児童生徒集団の特徴とを分離することができない。また、同一の個人内の時間経過に伴う発達・変化を追える調査デザインにはなっていない。縦断的な調査デザインでないため、児童生徒一人一人ごとに品格が育っていくプロセスを追うことは困難である。

キャラクター・エデュケーションの評価に関する今後の課題として、2 点挙げることができる。

1 点目は、縦断的な調査デザインを計画し、児童生徒個人の発達・変化をより細かく見ていくことである。縦断的な調査デザインにより収集されたデータは、個人に関する反復測定データであり、時系列データとなる。こうした時系列データに適切な統計的方法についても、近年提案が進んでいる(e.g., 三宅・高橋, 2009; 宇佐美・荘島, 2015)。縦断的な調査デザインを用いて、収集されたデータに対して適切な統計的方法を用いて分析を行うことが重要である。

2 点目は、児童生徒用品格尺度(井邑他, 2013)以外の方法でも測定を行い、キャラクター・エデュケーションの評価を多面的に行うことである。例えば、質的な方法と量的な方法を併用するマルチメソッドを用いる(青木・川合・山田・宮崎・新・橋ヶ谷, 2012)

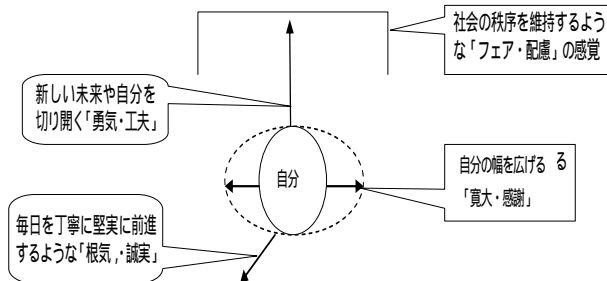


Figure 1 4種類の品格モデル

こともできるだろう。また、品格そのものを測定するのではなく、標準学力テストの結果や学校環境の充実度など他の指標を見ることで、間接的にキャラクター・エデュケーションの効果を測る(青木・川合・山田・宮崎・新, 2013)といったやり方も考えられる。

(青木多寿子; 広島大学, 山田剛史; 岡山大学, 井邑智哉; 精華女子短期大学)

(3) 倫理的な観点から

- 児童生徒の品格; ケアの観点から -

井邑ら(2013)は、「児童生徒の品格と Well-being の関連 - よい行為の習慣からの検討」と題した論文のなかで、心理学的な調査に基づいて、「児童の品格は、“根気・誠実”、“勇気・工夫”、“寛大・感謝”、“フェア・配慮”の4種類から構成される」という事実を解明している。井邑らの心理学的な実証的研究は、ケアの観点からすれば、興味深い局面に光を当てている。

わたしたちが築く人間関係は、ほかのひとをケアしほかのひとにケアされるという営みによって成立している。ケアは、英語の care に由来しており、だれかほかのひとのことを心配して、そのひとの面倒をみる、という行いを表している。たとえば、学校のなかでは、まずは教師が児童をケアし、教師に支えられて児童はほかの児童をケアし、教師も、やはりほかのひとにケアされて、日々の活動を進めている。だから、ケアは、相手にたいする気づかいから生まれる関与と、それに促されて相手から露わになる応答とが醸し出す助けあいである。このような態度が含む成分として、On Caring の著者ミルトン・メイヤロフ(Milton Mayroff)は、「忍耐」(patience)、「正直」(honesty)、「信頼」(trust)、「謙虚」(humility)、「希望」(hope)、「勇気」(courage)を挙げている。

井邑らの言う「根気」は、「いつも自分で始めたことはきちんと終わらせる」という姿勢であるから、そこには、メイヤロフの言う「忍耐」が現れる。わたしたちは、嘘とか偽りとかがないところに、「正直」をみてとるので、それは、「他の人たちが見ていない時でもさばらない」という、品格が内含する「誠

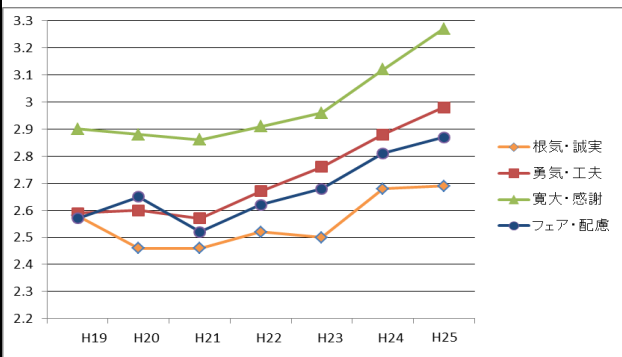


Figure 2 品格教育の成果(中学2年)

実」に繋がる。謙って相手の言うことに耳を傾けなければ、「相手が間違っただけをしても許してあげられ」ないし、「感謝すべきことがたくさんあることに気づ」きもしない。メイヤロフがケアに求めている「謙虚」は、井邑らが規定する「寛大」と「感謝」を生む。「他の人の心を傷つけないようにいつも気をつける」ときに必要な「配慮」がケアの気づかいであるのは、言うまでもない。

ケアの観点から倫理的な問題について先駆的な研究を展開した哲学者のひとり、ネル・ノディングズ(Nel Noddings)は、「わたしたちがケアするのは、愛しているからである」と明言している。すると、ケアは、井邑らが「たとえ誰かを好きでなくても公平に接する」態度として特徴づけている「フェア」と対立しているように見える。しかしながら、ケアの観点は、公平さの視点を無視しているのではない。それは、「フェア」をはじめから行為の第一原理として掲げる頑な態度を戒めている。そうであるからこそ、ケアするひとは、公平さを考慮しなければならない場面でも相手の想いに配慮しようとして、しばしば葛藤に悩むのである。その意味あいでは、ケアの遂行には、「少々反対されても、自分が正しいと思う考えを主張できる」という「勇気」が欠かせないし、ケアが行きづまったときには、「他に方法がないかなと考え」ようとする「工夫」の心構えも要る。

このように見てくると、児童の品格を形づくっている、「根気」と「誠実」、「勇気」と「工夫」、「寛大」と「感謝」、「フェア」と「配慮」は、相手を気づかい相手の気持ちを慮って、相手の必要に応えたり相手の苦しみを和らげたりするケアの精神の成分として定位できる。それゆえ、我田引水の誇りを免れないかもしれないけれども、ケアの見地からすれば、Character Education は、ケアするところを涵養する教育である、と明示してもよいのである。

(新 茂之；同志社大学)

(4) 特別支援教育の観点から

- 品格教育の未来：インクルーシブ教育システムの観点から -

障害者の権利に関する条約(2006)第24条によれば、インクルーシブ教育システムとは、「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」であり、障害のある者が教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供される等が必要とされている。この「合理的配慮」とは、

個々の障害のある幼児児童生徒の状態等に応じて提供される、多様かつ個性が高いものであり、教育内容や教育方法、支援体制、施設・設備面の配慮(中央教育審議会初等中等教育分科会、2012)を指す。

従前の特殊教育では、こうした配慮や専門的な支援は、特殊教育の専門家が旧特殊教育諸学校や特殊学級、通級による指導において行ってきたが、特別支援教育が開始されてからは、通常の学級に在籍し、通級による指導も受けていない特別な教育的ニーズのある児童生徒への指導もその範疇に入った。しかし、通常の学級の担任のうち、こうした児童生徒への支援について専門的に学んだ者は少なく、どのように対応してよいか悩んでいる者は少なくない。このように、現代の学校では、通常の学級に在籍する児童生徒の学力等が多様化しており、特別支援教育コーディネーターの指名や支援員の配置、教員の専門性向上、組織的対応の強化など、少しずつ体制整備は行われつつあるものの、多様なニーズに応じた適切な支援は十分とは言えない。

インクルーシブ教育システム構築のためには、多様性のある人々の能力向上を目指すのみならず、その多様性を認めあう環境整備も求められている。そうした意味では、品格教育の導入は、インクルーシブ教育システムを構築するための近道となる可能性を秘めている。なぜなら、川合(2013)が述べるように、品格教育とは、子どもや保護者の社会的経済的立場にかかわらず推進されるべきものであること、学校全体の改革であり、児童生徒や保護者も含む学校関係者全員が関わる必要があること、小学校から高等学校まで継続的に品格教育を実践していくと効果的であること、が挙げられる。

日本において品格教育を導入する際には、定着までに長期間かかるため、管理職の1校あたりの在任期間の延長、専任の品格教育推進教師の設置、品格教育を含めた教科領域間連携の実施、家庭や地域との連携など、持続可能な形で品格教育を推進するための方策を検討する必要がある。また、品格教育を日本で導入するには、道徳の時間を用いることが推奨されることがあるが、交流及び共同学習への品格教育の導入も検討する必要がある。その理由は、交流及び共同学習は、特別支援学校や特別支援学級に在籍する障害のある児童生徒等にとっても、障害のない児童生徒等にとっても、共生社会の形成に向けて、経験を広め、社会性を養い、豊かな人間性を育てる上で、大きな意義を有するとともに、多様性を尊重する心を育む(中央教育審議会初等中等教育分科会、2012)ことを目標としているためである。

このように、日本の従来の教育課程や教科領域等にうまく品格教育のエッセンスを加え、日本型品格教育を推進していくことが、日本における品格教育の未来と共生社会を目指したインクルーシブ教育システム

の構築の相互に役立つのではないかと考えられる。

(川合紀宗；広島大学)

(5)視覚伝達デザインの観点から
- 生徒会活動と品格教育 -

岡山県岡山市立岡山中央中学校では、学校経営および教育活動としての「良い学校づくりプロジェクト」の柱として Character Education を導入し、実践している。実践は、大学教員が Character Education について学校及び教員にプレゼンテーションを行うことからスタートした。その後、大学教員は生徒にもプレゼンテーションを行った。すると、生徒会から反応があって、Figure 3 の学校独自のポスターを作成することに繋がった。また、生徒会主導で、あいさつ運動やいじめ撲滅運動に取り組み始め、その活動は校内だけでなく、家庭・地域へと展開した。加えて、「なぜ学ぶのか」を考える生徒が増えつつある。生徒主導の活動は、さらに、教員の学校経営への参加意識、教員同士の仲間意識が向上するという成果もみられている。

(6)総括
- キャラクター・エデュケーションの再定式化の必要性について -

本研究の原点として意識されつづけてきた実践は、ボストン大学などを拠点として展開されているキャラクター・エデュケーションであった。そうした種類のキャラクター・エデュケーションの影響は、本研究のメンバーが中心になって 2011 年に出版した『もう一つの教育』にも現れている。そこでは、例えば、品性に関して「考え方が言葉になり、言葉が行為になり、行為が習慣になり、習慣が品性になり、品性は運命につながる」という捉え方を紹介している。また、アメリカでのそうしたキャラクター・エデュケーションが「3つのH」の教育と言われていることも紹介されており、「3つのH」のうちの一つは、「頭：知性」である。つまり、思考や言葉が、習慣や品性を形成するうえで不可欠の要素であると捉えているのである。

しかし、本研究の取り組みは、模範としたアメリカ型のキャラクター・エデュケーシ

ョンから幅を広げ、よい意味で新たな歩みを始めているように思われる。例えば、橋ヶ谷や川合の取り組みは、思考や言葉という経路以外に、よい習慣に到達する経路を探る試みと言えよう。そうであれば、新たな歩みを始めた本研究グループによるキャラクター・エデュケーションに関して、言葉や思考という経路に限らず、多様な経路により望ましい習慣形成に至る取り組みであることが鮮明になるように定式化し直すことが今後の課題として浮かび上がってくるように思われる。

(宮崎宏志；岡山大学)

引用文献

- 青木多寿子 (編著) (2011). もう一つの教育 - よい行為の習慣をつくる品格教育の提案 ナカニシヤ出版
- 青木多寿子・高橋智子・柴英里 (2012). 学校全体で取り組む品格教育の効果について 広島大学教育学研究科紀要, 61, 1-8.
- 青木多寿子・川合紀宗・山田剛史・宮崎宏志・新茂之 (2013). 米国で視察した品格教育 (Character Education) の実際(3) - セントルイスの場合 広島大学大学院教育学研究科紀要 第一部, 62, 9-18.
- 青木多寿子・川合紀宗・山田剛史・宮崎宏志・新茂之・橋ヶ谷佳正 (2012). 米国で視察した品格教育 (Character Education) の実際(2) 学習開発学研究, 5, 47-59.
- Aoki, T., Takahashi, T., Yamada, T., Hashigaya, Y., & Miyazaki, H. (2013). The relationship between character strengths and well-being in Japanese children and adolescents (4). The 13th European Congress of Psychology. 2013/7/11. Stockholm, Sweden.
- 青木多寿子・山田剛史・若井田正文・Berkowitz, M・二宮克美 (2013). 積極的生徒指導を考える(7) - よい行為の習慣づくり (character education) にエビデンスを活用する 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, S134-S135.
- 井邑智哉・青木多寿子・高橋智子・野中陽一郎・山田剛史 (2013). 児童生徒の品格と Well-being の関連-よい行為の習慣からの検討 心理学研究, 84, 252-253.
- Milton Mayeroff, *On Caring* (1971), HarperPerennial paperback edition, New



Figure 3 生徒作成のキャラクターと啓発ポスター

York: HarperCollins Publishers, 1990, pp. 23-35.

川合紀宗 (2013) 米国の公教育における品格教育の特別支援教育への適用 - ミズーリ州の公立学校における取組の視察を通して - . 日本特殊教育学会第 51 回大会論文集 .

国際連合 (2006) 障害者の権利に関する条約 . 2006 年 12 月 13 日, http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinken/index_shogaisha.html (2015 年 2 月 23 日閲覧)

厚生労働省 (2011) 所得再分配調査 .

Nel Noddings, *Caring: A Feminine Approach to Ethics & Moral Education*, Berkeley: University of California Press, 1984, p. 46.

三宅和夫・高橋恵子 (編著) (2009). 縦断研究の挑戦 - 発達を理解するために 金子書房

Park, N., & Peterson, C. (2005). The values in action inventory of character strengths for Youth. In K. A. Moore, & L. H. Lippman (Eds.), What do children need to flourish? Conceptualizing and measuring indicators of positive development. New York: Springer. pp. 13-23.

Ryan, K., & Bohlin, K. E. (1999). *Bulding character in schools; Practical ways to bring moral instruction to life*. CA: Jossey-Bass.

中央教育審議会初等中等教育分科会 (2012) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告).

宇佐美慧・荘島宏二郎 (2015). 発達心理学のための統計学 - 縦断データの分析 誠信書房

Yamada, T., Aoki, T., Hashigaya, Y., Kawai, N., & Atarashi, S. (2013). The relationship between character strengths and well-being in Japanese children and adolescents (5). The 13th European Congress of Psychology. 2013/7/11. Stockholm, Sweden.

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 43 件)

1. 青木多寿子(2014). 品格教育とは何か: 心理学を中心とした理論と実践の紹介. 発達心理学研究, 25, 432-442. (査読あり)

2. 井邑智哉・青木多寿子・高橋智子・野中陽一郎・山田剛史(2013). 児童生徒の品格と Well-being の関連-よい行為の習

慣からの検討 心理学研究, 84, 252-253. (査読あり)

[学会発表](計 35 件)

1. 青木多寿子・山田剛史・若井田正文・Berkowitz, M・二宮克美(2013). 積極的生徒指導を考える(7) - よい行為の習慣づくり (character education) にエビデンスを活用する 日本教育心理学会第 55 回総会発表論文集, S134-S135. 8 月 18 日, 法政大学. (シンポジウム)

2. 青木多寿子 (2013). よい行為の習慣をつくる品格教育の提案, 日本学校心理士第 15 回大会. 9 月 15 日, 皇學館大学 (招待講演)

[図書](計 7 件)

1. 青木多寿子 (編著) (2011). もう一つの教育 - よい行為の習慣をつくる品格教育の提案 ナカニシヤ出版 (総頁数 73 ページ)

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 多寿子 (AOKI TAZUKO)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 10212367

(2) 研究分担者

橋ヶ谷 佳正 (HASHIGAYA YOSHIMASA)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 50252945

宮崎 宏志 (MIYAZAKI HIROSHI)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 30294391

山田 剛史 (YAMADA TSUYOSHI)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号: 10334252

新 茂之 (ATARASHI SHIGEYUKI)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号: 80343648

川合 紀宗 (KAWAI NORIMUNE)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号: 20467757

井邑 智哉 (IMURA TOMOYA)

精華女子短期大学・幼児保育学科・講師

研究者番号: 80713479

(3) 連携研究者: なし